

# クローズアップ

本学教員の研究を  
詳しく紹介

## 古典を読み継ぐ

### 人間関係から読み解く 『源氏物語』

物語は作中人物のさまざまな人間関係を語ることによって形成されているという側面を持ちます。物語に語られている人間関係を分析することは、その物語がどのような構造を持っているのか、どのようなことを描こうとしているのか、といったことを明らかにする一つの方法となりうるものでしょう。

私がおこなってきた研究の一つは、そのように作中人物の人間関係

に注目することで、『源氏物語』のいわゆる「続編」の物語を読み解こうとするものです。ここでいう「続編」とは、「宇治十帖」（現存の『源氏物語』五十四帖の物語のうち、終わりの十帖）と一般に呼ばれる物語を主に指します。『源氏物語』の主人公として知られる光源氏の没後の世界を描いたもので、宇治を主な舞台とする物語です。そこでは、薫（光源氏の子）・匂宮（光源氏の孫）の恋やそれにまつわる女性たちの苦悩などが語られています。

さて、人間関係には、親子関係、きょうだい関係、男女関係、友人関係、師弟関係等々、さまざまなもの

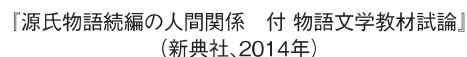
が存在しますが、それらの中でも私が特に注目してきたのは、親子きょうだい関係です。その一つの要因として、主な研究対象としてきた「宇治十帖」の主人公ともいべき薫が、複雑な親子きょうだい関係を持つ人物であるということが挙げられます。

先ほど薫について「光源氏の子」と記しましたが、実は、薫は光源氏の正妻女三の宮と別の男性との間に生まれた子、すなわち不義密通の末に生まれた子であり、しかし世間的には光源氏の子として認識されている、という人物でした。薫自身、早くから自らの出生に疑いを抱いてお



宇治川







『湖月抄』(奈良教育大学図書館所蔵、913.361-14)

折して付しており、それまでの諸注を集成したものとなっています。このような書物をみると、『源氏物語』が確かに各時代の人々によって読み継がれてきたものであるということ、を、少しイメージしやすくなるのではないのでしょうか。

また、写真にみえる文字にも注目したいところです。現代の私たちが日常的に目にしたり書いたりする文字とは字形などが大きく異なっています。古典の本文を活字で読むことに慣れてしまっていると、それがもともとこのようなくずし字で書かれて伝わってきたということを見過ごしがちになるような気がします。

ちなみに、写真の『湖月抄』は印刷による書物ですが、江戸時代に印刷技術が発達して出版文化が形成されるまで、書物は基本的に手で書き写すことによって広まり、受け継がれてきました。そのような事実も、また、それゆえに生じる誤写などのような現象についても、教科書などで既に活字化されたものにばかり触れていると、やはり見落としてしまい

かねないのではないかと思います。

従来の古典教育(学習)では、『源氏物語』などの古典について、古くから読み継がれてきたものであるということを前提に、その魅力を探るといった立場から、作品自体を読むことに重きが置かれ、ほとんどの時間が費やされてきたような印象があります。勿論、作品の内容を捉えることも重要なことですが、一方で、そのような作品がどのように読み継がれてきたのか、受け継がれてきたのか、という点に目を向けることで学べる事柄も少なくないのではないのでしょうか。

そのような古典の享受・受容、継承に関する学習の問題についても、前述の『源氏物語』の人間関係とともに研究テーマとしてきました。

## 今後について

学習指導要領において「伝統や文化に関する教育の充実」が掲げられ

て以降、古典教育(学習)の果たすべき役割はより重要視されるようになってきました。2011年度からは小学校でも古典教育(学習)がおこなわれています。中学校・高等学校での古典教育(学習)もそれを踏まえたものになっていくでしょう。古典の魅力や価値について、作品自体の内容からも勿論ですが、それ以外の観点からも多角的にとらえていくことが、ますます必要になってくるのではないのでしょうか。

奈良教育大学に勤務することとなった昨年度以降、現職の先生方や教員志望の学生の皆さんと接する機会により多く恵まれるようになりました。そのような環境をいかして、『源氏物語』を含む数々の古典についてより深く学び合い、広くその魅力や価値を探り、そして、それらを教育(学習)にいかす方法などについて、議論を重ねながら模索していきたいと考えています。

